

はじめに

本書は中学校・高等学校国語科教諭免許状を取得するための「国語科教育法」「国語科指導法」のためのテキストとして刊行したものです。本書の特色は、理念的な部分を排し、実際に「教育現場で教える」ことを最優先して、教え方に特化した点に特色があります。

国語教師は、非常にやりがいのある仕事です。大学生のみなさんは小学校から高等学校までの12年間で様々な先生に巡り会い、その中で多くの授業を受けてきた経験に何かを感じ、教員免許の取得を志したのだと思います。実は大学における教職課程だけで「教え方」を全て伝えるのは不可能に近く、「教え方」については自分たちが経験してきた授業が、自分自身の「教え方」の基礎となります。本書は「教える側からの見え方」を紹介し、その基礎の上に「教え方」を積み上げる手助けをするようなイメージです。

実際には教壇に立つまでは身につけなければいけない知識や技術は山ほどあります。もちろん、国語教師になるために必要な知識を地道に積み上げていくことはとても大切なことなのですが、「教える面白さ」にたどり着く前に、国語教師への道をあきらめてしまう人がいることはとても残念に思います。まずは教育実習には行ってみてほしいと思います。授業はライブです。「習うより慣れろ」という側面があることは間違ひありません。まず、模擬授業や教育実習を通して「教える」ことを経験してもらい、その経験を基に国語教師への道に進むかを考えてほしいと思います。

本書では、30回中20回は教科書教材の教え方を扱いますが、残りの10回は教科書教材の枠組みを超えた自主教材による授業を模索します。自主教材とはどういうことかというと、例えば中学校学習指導要領国語編解説では「読むこと」の言語活動例として、「報道の文章（新聞や雑誌、インターネットなど）」や「実用的な文章（広告、商品などの説明資料、取扱説明書、行政機関からのお知らせなど）」を挙げていることからわかるように、教科書教材以外の自主教材による教材開発を念頭に置いているのです。

教育実習で自主教材を使った授業をすることはまずありませんが、教員採用試験を経て国語教師になったら、ぜひ、自主教材による授業を模索してください。本文でも書きましたが、国語教科書は他教科の教科書とは異なり、「作品集」という色合いが強く、「教える内容そのもの」ではありません。国語科の対象となる日本語は、私たちの身の回りに溢れています。より身近な日本語を自主教材として扱い、活きた言葉を教えることは、あなたの国語教師としての幅を広げることになるでしょう。

国語教師は文学や言語を扱いますが、まずは「伝える人（教師）」と「伝えられる人（学習者）」という人間ありきだと思います。「まずは教えることを体験してみよう！」これが著者一同からのメッセージです。あなたが国語を教えることの楽しさに気づき、私たちの仲間になってくれることを強く願っています。

2025年3月21日
編著者 森 篤嗣

目次

はじめに	iii
本書の使い方	x

第①章 国語科教育の目的

1

第①節 国語教育と国語科教育	2
1. 国語と日本語	2
2. 国語科教育と国語教育の共通点と相違点	3
3. 言語発達段階と国語教育	4
4. 国語科教育と英語科教育の共通点と相違点	5
第②節 国語科教育の史的変遷	9
1. 国語科の成立	9
2. 戦前の国語科教育史	9
3. 戦後の国語科教育史	10
4. 全国学力調査の歴史と入試制度	12
第③節 国語科教材と教科内容	15
1. 教科書と教科内容の関係	15
2. 「教材を」と「教材で」	16
3. 「内容」の扱い方	18
4. 「構成」の扱い方	18
5. 「表現」の扱い方	19
第④節 国語科は何を教える教科か	23
1. 国語科の教科内容	23
2. 〔知識及び技能〕の扱い方	24
3. 〔思考力、判断力、表現力等〕の扱い方	26

第②章 国語科教育の方法

31

第①節 国語科授業をデザインする	32
1. 国語科単元と教材の関係	32
2. 国語科の単元指導計画	33
3. 国語科の本時指導案	36

第②節 国語科授業で必要な技術（発問や板書）	39
1. 国語科授業における二種類の発問	39
2. 授業を支える「大きな発問」	40
3. アドリブ的な「小さな発問」	42
4. 国語科の板書技術	43
第③節 国語科と主体的・対話的で深い学び	46
1. 国語科と主体的・対話的で深い学び	46
2. 主体的な学び	47
3. 対話的な学び	49
4. 深い学び	50
5. 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた国語科授業改善	50
第④節 言葉による見方・考え方	53
1. 国語科における言葉による見方・考え方	53
2. 言葉による見方・考え方と認知能力	55
3. 対象の捉え方と言葉：教科書教材の実例から	55
第⑤節 国語科における評価とテスト	59
1. 国語科における評価とテスト	59
2. 国語科授業における生徒の反応に対する口頭評価	60
3. 国語科テストの作成方法	62
第⑥節 国語科学習指導案の書き方	68
1. 国語科学習指導案の全体像	68
2. 単元と教材	69
3. 単元目標の書き方	70
4. 生徒観・教材観・指導観の書き方	72
5. 単元の評価規準の書き方	72
6. 単元指導計画の書き方	74
7. 本時の学習の書き方	75

第③章 国語科教育の内容

77

第①節 文学教材の扱い方	78
1. 文学教材の「内容」「構成」「表現」	78
2. 「少年の日の思い出」の「内容」の扱い方	79
3. 「少年の日の思い出」の「構成」の扱い方	80
4. 「少年の日の思い出」の「表現」の扱い方	83

第②節 説明文教材の扱い方	85
1. 説明文教材では筆者の「書きぶり」を学ぶ	85
2. 「ダイコンは大きな根?」の「構成」「表現」と筆者の「書きぶり」	86
3. 「シジュウカラ」の「構成」「表現」と筆者の「書きぶり」	89
第③節 詩教材の扱い方	93
1. 詩教材では短い言葉に「内容」「構成」「表現」が凝縮	93
2. 新川和江「わたしを束ねないで」	95
3. 高村光太郎「レモン哀歌」	97
第④節 言語教材の扱い方	101
1. 〔知識及び技能〕は幅広い言語教材で扱われる	101
2. 漢字教材の扱い方（言葉の特徴）	102
3. 言葉教材の扱い方（言葉の特徴）	103
4. 文法教材の扱い方（言葉の特徴）	104
5. 情報教材の扱い方	105
6. 言語文化教材の扱い方	106
第⑤節 「話すこと・聞くこと」教材の扱い方	108
1. 「話すこと・聞くこと」「話し合うこと」と言語活動例	108
2. 「話すこと」教材の扱い方	109
3. 「聞くこと」教材の扱い方	111
4. 「話し合うこと」教材の扱い方	112
第⑥節 「書くこと」教材の扱い方	115
1. 「書くこと」と言語活動例	115
2. 「書くこと」教材の扱い方	116
3. 相互評価ワークショップの実施	118
4. 設定した評価規準の妥当性と信頼性	119
5. 自身の評価の平均値と標準偏差	120
第⑦節 中学校での古文教材の扱い方	123
1. 古文と古典について	123
2. なぜ古文を学ぶのか	123
3. 古文の授業の準備	124
4. 中学校の古文教育における最大の壁	125
5. 「歴史的仮名遣い」に慣れる	126
6. 助動詞「ぬ」を理解する	128
7. 「主語」を押さえる	129
8. 和歌の学習	130

第⑧節 高等学校での古文教材の扱い方	133
1. 学習指導要領の確認 133	
2. 古文の授業の準備 134	
3. 授業の実践報告を調べる 134	
4. 古典文法に向き合う授業が大切 135	
5. 動詞の活用をしっかり定着させる 135	
6. 語呂合わせで覚える 136	
7. 古典文法のテキストを相対化させる 136	
8. 英文法を利用する 138	
9. 「和歌」の鑑賞は作者も含めて 139	
第⑨節 中学校での漢文教材の扱い方	142
1. 中学校における漢文教材 142	
2. なぜ漢文を学ぶのか 142	
3. 教材「故事成語」 145	
4. 寓話の「外」に触れるここと（高等学校における発展へ） 148	
第⑩節 高等学校での漢文教材の扱い方	149
1. 高等学校において漢文教材を用いる科目 149	
2. 教材「史記」 150	
3. 何を学ぶ教材と位置づけるか 150	
4. 読書教材としての「史記」 153	
5. 日本において様々に受容されてきた「史記」 154	

第④章 国語科教育の実践 157

第①節 ライティング・ワークショップ／リーディング・ワークショップ	158
1. 自立した書き手・自立した読み手を育てる 158	
2. 1回の授業の流れ 159	
3. 書くこと・読むことを大事にする共同体と環境づくり 160	
4. 日本における導入の経緯と難しさ 162	
第②節 演劇的手法を用いた授業実践	165
1. 演じる活動と国語科 165	
2. 架空の世界の経験によって可能になる「表現と理解の相互循環」 166	
3. 文学教材の読みの授業での活用：「少年の日の思い出」を例に 168	
第③節 ポスター・や広告を用いた批評の授業実践	172
1. 国語科における批評の対象 172	
2. ポスター・や広告を用いた国語科教科書教材 173	

3. ポスターを用いた批評の授業実践例	174
4. 広告動画を用いた批評の授業実践例	177
第④節 情報の扱い方（メディア・リテラシー）を育てる授業実践	179
1. メディア・リテラシーとは	179
2. 「パスファインダー」を作成する	180
3. 新聞記事に対する投書を書いて投稿しよう	183
第⑤節 言葉への気づきを促す授業実践	186
1. 言葉への気づきとは	186
2. 音声の働きや仕組みへの気づき	187
3. 話し言葉と書き言葉の違いへの気づき	190
4. 言葉の働きへの気づき	191
第⑥節 生成AIと対話しながら作文を書く授業実践	193
1. 生成AIと教育	193
2. 生成AIと対話しながら作文を書く前に	194
3. 生成AIと対話しながら作文を書いてみる	196
4. 生成AIと対話しながら作文を書く授業実践	199
第⑦節 国語と英語を連携させた授業実践	202
1. 複言語主義と国英連携	202
2. 揭示物から学ぶ国英連携	203
3. マンガのセリフで学ぶ国英連携	205
4. 機械翻訳で学ぶ国英連携	206
第⑧節 読書を楽しむ授業実践	210
1. 読書への関心を高める取組	210
2. 「ビブリオバトル」の授業実践	211
3. ポップづくりの授業実践	213
4. 「ビブリオエッセー」の授業実践	214
第⑨節 読解から展開する創作活動の授業実践	217
1. 続き物語・If物語とは	217
2. 続き物語の授業実践「星の花が降るころに」「羅生門」	218
3. If物語の授業実践「走れメロス」「山月記」	220
第⑩節 詩・短歌・俳句を筆で書く授業実践	224
1. 「書写」の位置づけ	224
2. 好きな「のはらうた」を「散らし書き」する	225
3. 創作「のはらうた」を「散らし書き」する	226
4. 短歌を創作して仮名半紙に書く	228
5. 俳句を創作して短冊に書く	229

本書の使い方

■「本書の対象者」について

本書は中学校・高等学校国語科教諭一種免許状を取得するための各教科の指導法の授業（「中等国語科教育法」「中等国語科指導法」など）を受講する教職課程の大学2・3年生を対象者として想定しています。

従来のテキストとは異なり、「教え方」に特化した実践的な「教育現場で役立つ」というの側面を強く志向したテキストとなっています。したがって、大学3年生以降の「教育実習事前事後指導」や「教職実践演習」にも使っていただけます。

■「本書の構成」について

本書に収められた全30節はおおむね「この節のポイント」「キーワード」「本文」「課題（+ヒント）」「まとめ」「もっと知りたい人へ」の順序で構成されています。

■「この節のポイント」「キーワード」について

「この節のポイント」では、背景的知識とその節で考えてほしい「ねらい」が示されています。学習を始める前に、その節でどのようなことを学ぶのか、あらかじめ全体像が把握できるようにしてあります。学生の予習として活用するほか、講師の方向けには「この節のポイント」を授業導入のウォーミングアップとして雑談的に学生に投げかけてみることで、スムーズにその日の授業内容に入っていけるのではないかと思います。

「キーワード」は、その節の重要なキーワードが挙げられています。学生の復習に活用するほか、講師の方向けには学生の理解内容を確認するために、口頭や記述（確認テストや期末テスト）でキーワードの説明ができるか問うてみるという使い方ができるかと思います。

■各節の内容について

本書で学ぶべき内容は大まかに四つのセクション・段階に分かれています。

- ・第1章(1~4節) 国語科教育の目的や、国語科教育に関連する基礎的な知識を学ぶ。
- ・第2章(1~6節) 授業の進め方や指導案の書き方など、国語科教育の方法を学ぶ。
- ・第3章(1~10節) 国語科教科書教材の教材研究の方法やその具体的な教え方を学ぶ。
- ・第4章(1~10節) 国語科教書の枠を超え、自主教材の開発のアイディアを学ぶ。

全30節で構成されていますので、前期15回・後期15回の30回で1回に1節ず

つ進めいくことを想定しています。1節から20節目（第1章～第3章）までには、各教科書会社の教材が登場しますので、実際の教材を手元に置いて教材分析をしながら進めることをお勧めします。

本書で授業を進める際には、本書だけにとどまるのではなく、「学校現場でボランティアをする」ことや「模擬授業の発表をする」ことなど、様々なアプローチで国語科教育に関係する場に関わるように促していただければ、より良い相乗効果が得られるでしょう。

また、本書を学習したあとの教育実習においては、その教育実習校の特性に応じたアドバイスをしていただければ、より効果的かと思います。

■「課題」について

本書はアクティブ・ラーニングで授業が行えるように設計されています。のマークがある課題は、ワークシートをダウンロードして使用できます（

）。課題は、グループワークを想定していますが、個人で考えることももちろん可能です。時間に余裕がある場合には、まず個人で考えてアイディアを用意してからグループで話し合うように指示するとより効果的です。また、グループは常に同じメンバーではなく、シャッフルしてできるだけ多様な組み合わせになるように工夫することをお勧めします。様々な人に自分の考えを伝えるということそのものが、国語科教育法を学んでいく上でのトレーニングになります。

また、第4章の課題は、「中学生に対して行う課題」が中心となっています。教師を目指すみなさんには、模擬授業の教師や生徒になったつもりで、個人やグループで考えてみてください。

■「もっと知りたい人へ」について

各節末の「もっと知りたい人へ」では、本書の内容を専門的に深めていく際に推奨する文献を挙げています。比較的入手しやすく、理解しやすいものを中心に挙げています。ぜひ図書館や書店で探してみて、手にとっていただければと思います。

■個人で学ぶ場合／授業で学ぶ場合

本書は基本的に大学の授業で使うことを想定して編集されていますが、独学として個人で学ぶことも可能です。個人で学ぶ場合には、ただ単に「読む」のではなく、疑問に思った点や興味を持った点を先生や先輩に聞くなど、能動的な読みのきっかけにすることを意識してほしいと思います。複数のメンバーで学ぶ場合は、あらかじめ読む章を決めてきて、自由に討論するなどするとさらに効果的でしょう。

大学の授業で学ぶ場合は、講師の方の教育経験を含めて解説してもらえると思います。国語科教育は対象となる学習者や、行われる学校や地域の環境、そしてなんと



国語教育と国語科教育

この節のポイント

国語教育と国語科教育ということばは似ていますが使い分けるべきです。国語科は科目名であり、国語科教育は学校教育の一科目の教育を指します。それに対して国語教育は「国語＝日本語」という前提に基づき、乳幼児期から学齢期を経て日本語を身につけ、生涯に渡って磨き続けるプロセスです。国語教育は日本語を用いて教えられる学校教育全ての教科だけでなく、家庭や社会全体で行われます。また、国語科教育の特徴を考えるために、同じことばの教育である英語科教育とも比較してみましょう。

■キーワード

国語教育、国語科教育、国語と日本語、教授言語、生涯教育

1. 国語と日本語

みなさんは「国語」と聞くと学校の科目名のことを思い浮かべるのではないでしょうか。では、「日本語」はどうでしょうか。むしろ外国語（英語）の時間の方が「日本語訳（和訳）」などのように使うかもしれません。

日本人にとって「国語＝日本語」と言えそうですが、そうでない場合もあります。母語と母国語が異なる国もあるからです。例えばフィリピン人の母語はタガログ語だけでなくイロカノ語やセブアノ語など多数に渡ります。そのフィリピンの公用語は、タガログ語を元に作られたフィリピノ語と英語なのです。実は日本は日本国憲法やその他の法律で、日本語を公用語と定めていないため、日本語は日本の公用語ではありません。一方でパラオのアンガウル州は憲法で日本語を公用語と定めています。

また、日本には外国人も多数在住しています。外国人の方々にとっての「国語」は当然ながら、それぞれの母国の言語です。したがって、日本でも簡単に「国語＝日本語」と決めつけてはいけないという考え方もあります。

課題1：話し合ってみよう

みなさんが日本語が何不自由なくできるまで上達したのは何の影響によるもの



国語科授業をデザインする

この節のポイント

国語科教科書はやや特殊で、複数の教材（題材）で一つの単元を成すという形になっています。まずはこのことを理解し、その上で国語科の単元指導計画と本時指導案を作成するための基礎知識を身につけていきます。特に重要なのは、「考えさせる」「話し合わせる」「発表させる」など、「やること」だけを書いた放り出しにならないようにすることです。そのためには教材研究に基づき、その「教材で」何を生徒に気づかせるのかという教師の意図を記述できるようにならなければなりません。

■キーワード

単元、教材（題材）、単元指導計画、本時指導案、教師の意図

1. 国語科単元と教材の関係

国語科授業をデザインしていく上で、まず考えなければいけないのは単元と教材の関係です。国語科教科書において単元とは、文学教材や説明文教材と各言語活動や言語事項を扱う小教材を組み合わせた複数の教材から成り立っています。下記は2025年版光村図書中2の単元「表現を見つめる」です。

単元名「表現を見つめる」

- ・文学教材「走れメロス（太宰治）」
- ・小教材「描写を工夫して書こう：心の動きが伝わるように物語を書く」
- ・小教材「国語の学びを振り返ろう：「国語を学ぶ意義」を考え、コピーを作る」
- ・詩教材「鍵（茨木のり子）」

このように四つの教材（題材ということもあります）で「表現を見つめる」という単元が構成されています。単元名「表現を見つめる」はそのまま単元目標になっています。すなわち、小教材はもちろんのこと、「走れメロス」や「木」も「表現を見つめる」ために扱うということになります。



文学教材の扱い方

この節のポイント

文学教材では、登場人物の行動や心情など「内容」に焦点が当たることが多いですが、それだけだと非常に抽象的な議論に終始してしまい、感想を述べただけの授業になってしまうこともあります。表面的な理解で終わらせないように、本文の「表現」もしっかり検討して、内容理解を深めるための発問を検討しましょう。また、「構成」については当該教材だけではなく、他の教材でも活きる見方が扱えることがあります。「教材で」国語科の教科内容を教えることを意識して教材の「構成」を扱いましょう。

■キーワード

文学教材、「内容」「構成」「表現」、心情の変化、額縁構造、言語的な観点

1. 文学教材の「内容」「構成」「表現」

教材研究の観点は様々なものがありますが、ここでは第1章第3節でも扱った「内容」「構成」「表現」の三つの観点で再び検討してみたいと思います。扱う教材はヘルマン・ヘッセ（高橋健二訳）の「少年の日の思い出」です。「少年の日の思い出」は1931年に「Jugendgedenken（若き日の記念）」というタイトルでドイツの地方新聞に掲載され、それをヘッセと親交のあったドイツ文学者の高橋健二氏が翻訳し、1940年に『放浪と懐郷』（新潮社）に採録された作品です。その後、1947年に『中等国語二（2）』（文部省）に教材として掲載され、それ以来多くの国語科教科書に掲載される定番教材となっています。

「少年の日の思い出」は定番教材だけあって、教材としての教え方については様々な試みがなされてきました。その中でも定番は、「少年の心情の変化」や「少年の成長」に焦点を当てた授業、ないしは読者としての立場を強調して「同世代の共感」を語らせるといった授業が多くあります。本節では、「内容」としてはこの路線を継承し、それ以外に「構成」と「表現」の側面からの扱い方を紹介したいと思います。

この節のポイント

書くことの授業や読むことの授業というと、クラス全員が同じ課題で書いたり同じ文章を読んだりする姿が一般的には想像されるでしょう。一方、各自が自分で書くものや読むものを決めて活動に取り組む学習形態があります。それがライティング・ワークショップ（作家の時間）およびリーディング・ワークショップ（読書家の時間）です。

■キーワード

作家、読書家、実践共同体

1. 自立した書き手・自立した読み手を育てる

2017年版の学習指導要領では、「身に付けることができるよう指導」することとして、例えば「書くこと」においては、「目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること」（中3）などが挙げられています。確かに教師達は「指導」してきたのでしょうか。けれども、はたして生徒は、それで実際に生活のなかで、つまり授業以外の場面でも、こうした技能を活用して書くことを行うようになってきたのでしょうか。あるいは同様に、「読むこと」に関しても、教師は数々の事項を「指導」してきたはずですが、それで生徒は実際にそれを活かして授業以外でも読むようになってきたのでしょうか。生徒が書く／読むようになっていないのであれば、今までの「指導」に何か根本的な問題があるのでないでしょうか。

ライティング・ワークショップやリーディング・ワークショップにはこうした問題意識が通底しています。

ライティング・ワークショップおよびリーディング・ワークショップでは、同じ課題を与えて一律に書かせる、同じ文章を与えて一律に読ませるといった形をとります。そうではなく、生徒が自分で、何を書くか、何を読むかを決めます。

そこにあるのは、生徒を「自立した書き手」「自立した読み手」に育てるという発想です。仮に教師が手を入れて、その作品そのものの完成度は上がったとしても、そ